



竹田理々子

Ririko TAKEDA

帝京大学医学部附属溝口病院脳神経外科
〒213-8507 神奈川県川崎市高津区二子 5-1-1

脳神経外科医の「生き甲斐」

2018年12月10日に「健康寿命の延伸などを図るための脳卒中、心臓病その他の循環器病に係る対策に関する基本法」（脳卒中・循環器病対策基本法）が可決成立しました。今後脳卒中に対しても患者、医療者、行政が一体となり取り組んでいくことが求められています。

本号の「Special Interview」ではこの基本法の成立にもご尽力された、熊本市市民病院神経内科の橋本洋一郎先生をゲストにお迎えしました。現在、脳卒中診療は脳卒中内科、脳神経外科を含めたチーム医療であり、パスを使いながら最も効果的な医療を行うことが当然とされています。しかしその、今は「当たり前」だけれど、脳卒中診療の非常に大切な中心部分を築かれたのが橋本先生でした。対談からは「Stroke Neurologist」のこれまでのお仕事だけでなく、その姿勢を学ぶことができます。そして先生が訳された「生き甲斐」ダイアグラムはとても印象的です。「職業」「専門性」「情熱」「使命」そしてその4つの交点が「生き甲斐」。働く者であれば誰でも一度はこのダイアグラムのバランスに悩んだことがあるでしょう。橋本先生にとってはstrokeが、この中心にぶれることなくあるのだろうと僭越ながら感じます。これからも日本の脳卒中診療を導いていただきたいと思います。

また本号では「入門 脳ドック：読影の基本と実際」を特集し、7人の先生方が素晴らしい解説をしてくださっています。脳ドックは通常診療の読影とは異なるポイントや難しさがあるはずですが、ともすると通り一遍の読影になってしまいがちです。石川英洋先生が最後に述べられた「可能な限り画像変化の背景にある病態を考えながら読影することが重要」という一文は、脳ドック読影の際の姿勢を示していると思います。

他にも「脳神経外科手術のスタンダード」として、長谷川仁先生が脳動静脈奇形治療におけるhybrid neurosurgeonの意義について、「手術のコツとピットフォール」では藤巻高光先生が脳神経減圧術での硬膜閉鎖における髄液漏予防について解説しておられます。また「専門医に求められる最新の知識」では木下雅文先生らが脳腫瘍覚醒下手術から見える高次脳機能について、佐藤透先生らが脳動脈瘤手術後の新しい画像評価について述べておられます。いずれも各先生方の「生き甲斐」と言える領域で、熱く素晴らしい内容です。他にも通常連載、投稿論文を含み、本号もいつもながら充実した内容になっています。

引き続きこれからも先生方の「生き甲斐」が詰まった誌面をお届けしていきます。

